

新宿遷都

ミナガルデ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

都会派少年が幻想郷内で奔走するお話。（意味不明）

読んでね
!!!!!!

始

目次

1

始

「アンタはきつと、近日中に騒動に巻き込まれるよ」

今年も半ばに入つたある晴れた日の昼、胡散臭い占い師のオバチャンが言った。

新宿のこの一角はとても静かで、都心部とは思えない。

ビルとビルの間からカップルや家族連れの姿が見える。

隣に見えるおっちゃんやラジオは大音量で競馬の結果を流している。

「へえ、俺を女の子達に取り合つたりするのかな？」

モテ期到来って訳だ」

鈴木明は手に持ったパピコを2つに折りながら聞いた。

占い師のオバチャンは鈴木の目を見つめたまま言う。

「恋愛運に変化は無いけど、アンタは何かに巻き込まれて暫く家には帰れないだろうね。」

と、オバチャンは言う。

サラッと失礼な事を言う奴だな、と鈴木は思ったが、黙つてオバチャンの話聞く事にした。

「あとは…近いようで遠い所に連れてかれるね。」

「なんだそりや。どこの事だよ。」

「そりやとても遠い場所だよ。」

予言の内容があやふやでどうにも信用出来ない。

実は鈴木、この占い師のオバチャンの事を声を掛けられた時からあまり信用していない。自分に目をつけたかと思うといきなり占いや料として20000円を要求してきたのだから。尤も、払ってしまった自分にも非はあるのだが。

「やめとけやめとけ、その婆ちゃん、ぼったくりだぞ。」

たまに予言が当たるとして評判だったが今はこのザマだ。」

急に後ろから声をかけられ、鈴木は後ろに振り向いた。

さっきの競馬のおっちゃんが新聞を小脇に挟んで立っている。おっちゃんは「じゃあな」とだけ言うとうこうに見える人混みの中に入って行ってしまった。

「とにかく用心した方がいいよ！」

オバチャンが強く言う。

「へいへい。わかりましたよ。」

鈴木はこの予言を全く信用していなかったが、おっちゃんの「昔は予言が当たる事があつた」という発言と、オバチャンの妙な雰囲気当てられ、心の隅には留めておくこ

とにした。

鈴木が別れの挨拶をするとオバチャンは少しだけ手を振った後、新聞を読むのに精を出し始めた。

鈴木は足早に大通りに出た。

バックからスマートフォンを取り出し、目的の番号にかける。7回という長いコールの後、若い男の声が出る。

「はい、黒澤です」

「今から事務所に戻るけど、先に事務所に行っておいて。」

「了解した。お目当ての物は買えたのか？」

「ああ、買えたぞ。次の文化祭で使うヅラ。」

「そうか。では事務所で待っている。」

通話はそつげなく切られてしまった。

あ、他のメンバーにも声を掛けるように言っておけば良かったな、とも思ったが 別にいいか、と思っただけ鈴木は

江東区にある自分の事務所：もとい自分の家に向かう為に足早に新宿を後にした。